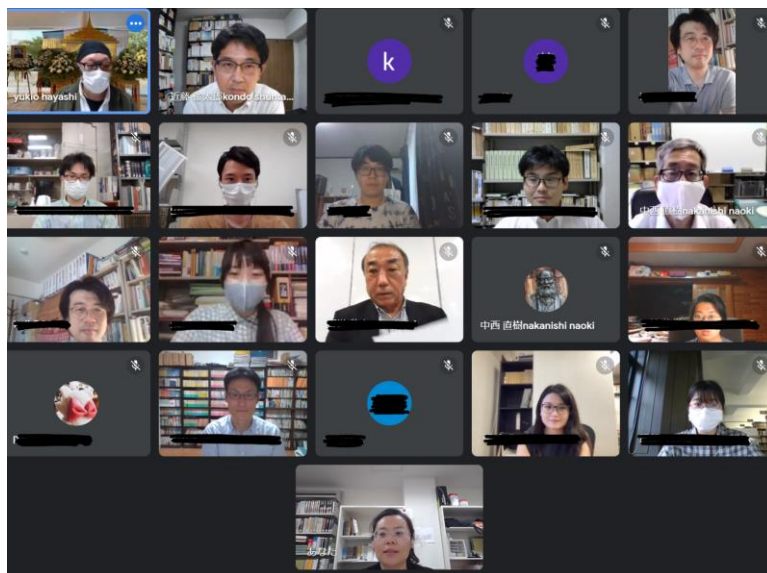


オンライン開催 (Google Meet)



オンライン参加者



❖ 概 要 ❖

2021 年 7 月 5 日、近藤俊太郎氏による講演「近代日本の親鸞論と社会主義の関係史」が開催された。本願寺史料研究所研究員の近藤氏は近代仏教史を研究しており、本講演では近代の親鸞像に大きな影響を及ぼした社会主義の歴史的背景とそこから読める親鸞論の展開について論じた。

コロナ禍にともなう感染防止のため、本研究セミナーはオンラインで開催された。林氏の司会の下、近藤氏の講演に続き、中西氏のコメントを踏まえ、参加者全員での討論が行われた。近藤氏の講演内容は以下の通りである。

講 演 者： 近藤 俊太郎 氏（本願寺史料研究所 研究員、
龍谷大学世界仏教文化研究センター 客員研究員）



近藤 氏

近藤氏は、近代日本における親鸞の研究の問題として、浄土真宗の近代教学と大谷派教学とが同一視される傾向があるという指摘から発表を始めた。特に清沢満之と暁鳥敏は近代の親鸞教学を代表する人物であるが、近代に入ってから親鸞論を発展させたのは、宗門内の議論だけではなく、一般人も親鸞について書物を著すことが数多くあった。その動向において重要な役割を果たしたのはマルクス主義である。近藤氏はマルクス主義・社会主

義の影響を4点から明らかにした。

1点目は、親鸞を非戦論と人間の平等性という理念から描く側面であり、主要人物は高木顕明と佐野学である。在家出身で後に真宗大谷派寺院の住職となった高木は、日露戦争下で著した「余が社会主義」において親鸞と社会主義の関係を明確に説明した。高木は、親鸞の仏教理解と社会主義とが無差別の平等世界の理想を共通していると考えており、その要素を手がかりに非戦論を解いた。そうした意味で、高木にとって念仏を基にした教団は一般的に社会のモデルとなりうると言える。佐野は、同じ路線で「同朋社会」というキーワードを利用し、被差別と対抗するための運動を試みた。佐野によれば、親鸞の仏教理解と社会主義は人間の平等性を主張する点で類似しているのみならず、社会は必然的にその理想的な状態にたどり着くという意味で歴史的な意義も同様である。興味深いのは、両者が親鸞と社会主義との関連付けにおいて、マルクス主義の鍵概念である「資本」の批判を参照せずに、あくまでも人間の平等性だけに注目した点である。

2つ目の側面は、宗教を阿片戦争と階級闘争と関連づける動きである。宗教を否定的にみる社会主義の文脈では驚くべき発想であるが、例えば三木清はエンゲルスの宗教死滅論を批判し、宗教とプロレタリア運動との密接な関係を主張する。近藤氏は、その論争におけるいくつかの方向性を紹介し、限られた例だけを挙げれば、極楽浄土を阿片のようなものと看做す親鸞批判者がいた一方、親鸞の宗教そのものを評価しながら、階級制度を創作した本願寺の組織を問題化する立場も認められると述べた。

近藤氏は、3点目として天皇制批判との関係を上げた。赤旗の発表した32年テーゼが象徴する社会主義は天皇制を批判し、反国家神道運動に繋がることが想像にかたくないが、親鸞を手がかりに天皇制を肯定するマルクス主義者もいたという。その例は上述した佐野であり、彼が親鸞の仏教理解に含まれる阿弥陀仏崇拝を天照大神信仰と同一に捉えた。その文脈で興味深いのは、社会主義は天皇制の批判と肯定との両方に繋がるという点のみではない。宗教の概念が再定義されたことによって社会機能論から内面的な問題に引き戻されることもあったという点である。社会主義の概念の理解が大きく変わらないものの、宗教の社会性が見直されたことにより宗教と社会主義との関係も再考されざるをえなかったと言えよう。

近藤氏が本セミナーで最後に紹介したのは敗戦後の動向である。戦後にも、親鸞と社会主義の言説に大きく関与した人物である佐野学と服部之総は活躍し続ける。前者は親鸞を中心に再び仏教と社会主義の共通点を主張する一方、後者は親鸞の思想に含まれる社会的問題を強調している。服部は、基本的に親鸞自身を評価するが、彼の思想から生まれた一

向一揆や階級社会の本願寺教団を批判し、民主主義革命を実現するために政治と絡まれない宗教に注目しなければならないと主張している。

なお、本講演の詳細については近藤氏の著書『親鸞とマルクス主義：闘争・イデオロギー・普遍性』（法藏館、2021 年）を参照。



中西 直樹 氏（龍谷大学 教授）



林 行夫 氏（龍谷大学 教授）